

第六節 第百三十五師團の作戰

第百三十五師團の編成より蘇聯軍の戦進の状況

一 師團の編成と配置

師團は二十年七月三十日¹⁷⁷⁸と改編して新設^{された}ものにして其の^{編成}

及各部隊の配置を左記要図の如し

當時に於ける師團全般の配置は予定^の防衛陣地に對し著しく

前方に過^るる有事の日本利を招く虞大なりしを以て軍の指示もあり

成^るべく早期に配置の変更を行ふ予定なりしが其の實現を見ず

して蘇聯軍の冬^の戦に遇^ひて師團の約三分の一は戦斗に参加し得^ず

状態に陥りたり

配置の変更は虎林の部隊を東^に東^に部隊を東陽^へと移

動し林^{中の}部隊は現状のままとする事ありしなり

0862

1724

軍

1725

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp>

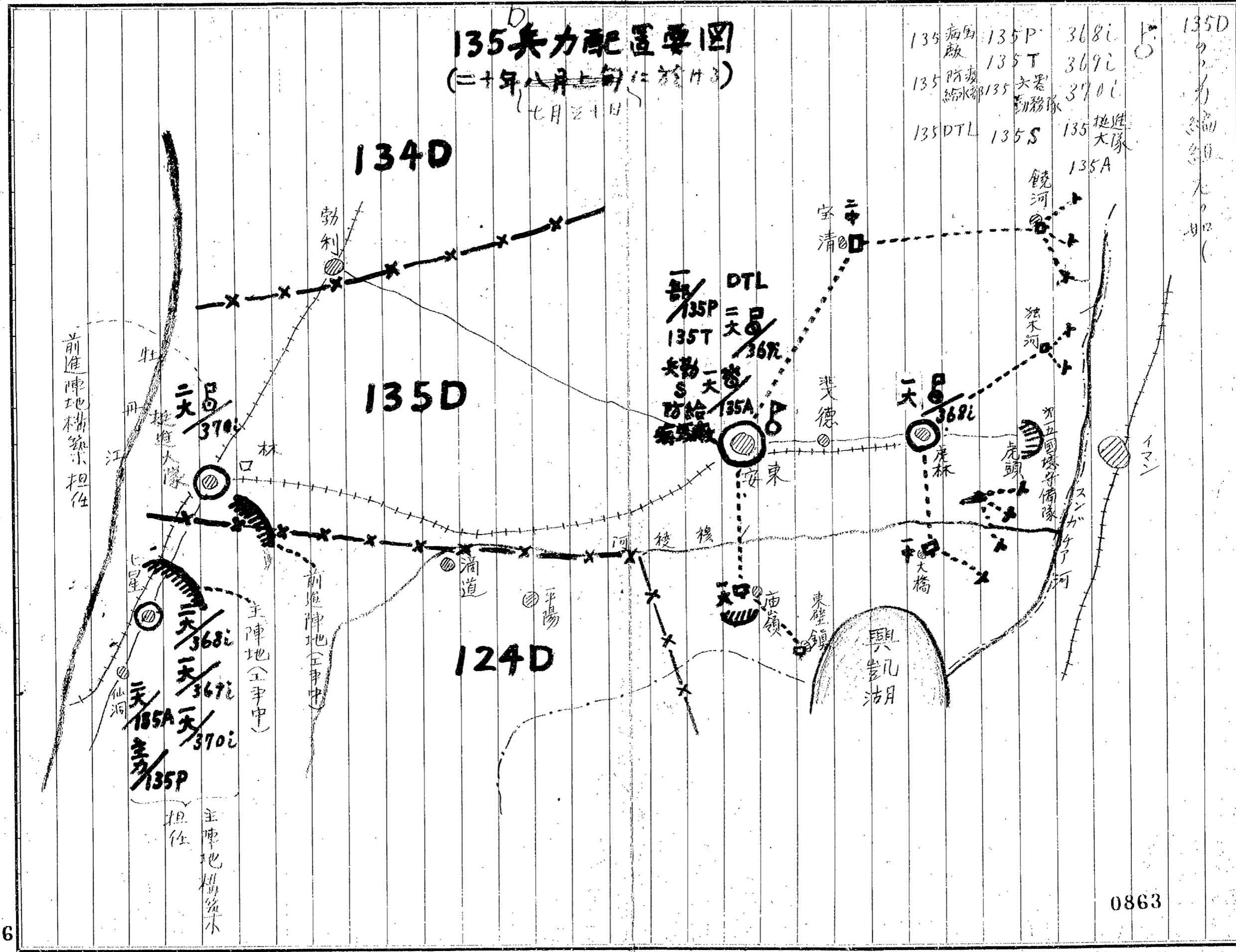
135兵力配置要図

(二十一年八月下旬に於ける)

七月三十一日

- 135 病馬敵 135P 368i
- 135 防務給水部 135T 369i
- 135 大器勤務隊 370i
- 135 DTL 135S 135 進隊大隊
- 135A

135D
の
力
編
組
に
関
し
て



陸軍

0863

1726

二 作戰準備の状況

1. 作戰計畫書

五年七月五日 師団の新設當時 既に關東軍の作戰方針は従
 来の攻勢作戰より全面守勢作戰に変更せられり而して第五軍
 の新作戰計畫の骨子概ね左の如し
 軍は一部を以て國境既設陣地と地形を利用し侵襲する敵の
 の戦力を破潰することに勉め主力(三師団基幹)は速かに穆稜
 西方、八面通西方、林口南方(七星)の主抵抗地帯に於て縦深に
 編成せる抵抗により敵の戦力を破潰し持久の目的を達成す
 而して防禦の重点は穆稜、牡丹江道に沿ふ地区とし堅固なる
 築城を施し且該方面の補給には萬遺憾なきを期す
 師団は五軍の方針に基き既に77B₃當時立案ありたる計畫に
 所要の修正を加へ之を確定せり其の大要左の如し
 師団は麻山(林口東方ニ原料)の線に前進陣地を七星の線に主
 陣地帯を構成し敵の戦力を破碎す
 防禦の重点は林口―七星道に沿ふ地区とし主として敵機甲

0864

1729

部隊を對象とし特に主陣地帯は縦深に編成す
 前進陣地の兵力は一大一中A一部Pとし勉めて多く敵の戦力を
 を消耗せしむるを任務とするも決戦に陥らざる如く行動す
 主陣地帯の兵力は尙留初八大主力A主力Pとするも前進陣地
 占領部隊撤退後は概収師団全力とす
 前進陣地構築に協力中の満軍部隊(三大)は戦斗に方
 リては予備隊とすし主陣地帯の戦斗に使用す
 若し軍に於て師団より二乃至三大の抽出轉用を命ずる場合に
 は主陣地帯の兵力の内より之に充當す
 國境警備隊(現に師団に於て國境に配置せるもの)は陣地の保
 持困難なるに至らば逆撃戦により敵戦力の消耗に勉む

築城

陸軍

師団の築城作業は77B、當時より麻山の前進陣地を二大に満軍
 三大を以て七星の主陣地を四大に二大A主カPを以て五月中旬工事
 開始、洞窟坑道等地下施設を重点として作業しありしか其の
 位置の変更、築城資材の不足等の為予定の如く進捗せず七月
 三十日師団編成と共に師団本部を同日部隊長会同を行ひ
 て従來の成果を検討し資材の取得、作業の方法等^も新に計画
 する所あり之が實行に着手中蘇聯の参戦^復に至りたり 開戦時に
 於ける進捗状況は対戦車対歩兵障碍物は殆ど未着手、其の他
 の工事は平均半成程度なり

八月八日ソ軍参戦同九日國境線突破以來其の攻撃速度は我を
 して半完成の既設陣地すら利用の余裕を與へず空しくも掖
 河周辺狹隘の地に後退し全く半前設備なき、裸の陣地に據り
 鉄牛の如く敵戦車に対し生身の体志りを以て立ち向ふの死地に
 追込み凄絶悲慘目を蔽うはしむる修羅の巻を展開するに
 至れり

9980

1729

3 交通、通信

1730

通信網は概収警備作戦に支障なき如く設備せられり
道路網の状況尤の如し

東安―虎林―虎頭道

東安―興凱―宝清―饒河道

東安―密山―廟嶺道

東安―勃利―林口道

東安―鷓鴣亭―林口道

饒河―独木河―虎頭道は独木河―虎頭間概収自動車を通ず

林口―楚山―七星―仙洞―樺林―掖河道(四佳線に沿ふもつ)は

作戦上重要な幹線道路なると楚山附近悪路の為自動車を通

せず工事中なりしが開戦迄に間に合はず作戦遂行に大なる支障

を来せり
―仙洞道

八面通―自興屯は新設の道路にして自動貨車を通ず本道路は

綏陽方面に侵入せし敵機甲部隊の一部の樺林方面への轉進(我が掖

河陣地左翼正面攻撃の為有効に利用せられたり

次び

4980

4. 教育、訓練

1731

軍

778 當時に於ける教育、訓練の状況を検討するに多數の未教育者補充兵及騎兵、砲兵其の他よりの歩兵部隊への轉属者の教育の重要性を痛感しありたるも、主力を以てする築城作業に没頭せしめられ遺憾ながら不十分なるを免れざる状況にあり師団編成後軍の指示もあり陣地構築の現地に於て作業を實施しつゝ教育訓練する方針により之が改善に勉めたるも旬日にして蘇軍の侵入に遇ひ成果の見えざるものなかりき

八月上旬に於ける各部隊の教育、訓練の程度概ね左の如し歩兵に在りては前者の程度速々なりしが戦場に於て歩兵として戦斗し得る者約五割他の者は之に追隨して幸うして戦斗し得る程度なり又騎兵出身の将校以下多數を占めありしは黒色とする所なり

8980 挺進大隊は兵各個に見るときは程度比較的良好なりしも幹部の若干が集合教育を受け遊撃戦斗の要領を修得せざる程度にして戦場に於て部隊本然の任務の遂行を之に要求

するは前途遠遠の感あり

1732

砲兵隊は分隊教練可能の程度なり

工兵隊は幹部の若干に本来の工兵出身者あるも他は一般に
名稱の工兵なり

但し各部隊共將校以下一般邦人として又軍人として満洲生活の
体験者多数を占め特に77B出身者は東安省に勤務しあ
りたる者多し

5 情報収集

情報収集は向地視察班よりの直接の資料、軍よりの資料
東安特務機関よりの資料により対蘇関係の情報を収集する
る外満洲國官廳に連絡して一般邦人、滿人、韓人、白系露路
人の動靜に注意せり

6980
當時に於ける蘇側の動向は一般に甚しく挑発的にして不法
行為を公然と行ひ露骨に我を侮蔑する態度を示せりも
我が國境警備隊及向地視察班は上司の指示に基き堪え
難きを堪え忍び難きを忍べり又蘇側よりの謀者の侵入頻

敏業にして之に内通する満人、鮮人あり秘密の保持は愈々我に不利なる形勢となれり

邦人は不安の念を懐きながらも「まさか日本が敗れることはあるまい」と信じ満人は「日本は近く敗れる」と信じありたるが如く満人の侮日態度は次第に濃厚となれり東安附近の某開拓団の如き徴用、入隊等の為男子の數次第に減少し老人、女、子供のみの家族を生ずるに至りたるが満人の態度の悪化に伴ひ次第に不安の念を増加し中には危険を感ずるものさへ生ずるに至り一時東安の陸軍空官舎に居住せしめたることあり

6 國境警備

師団担任の國境警備は廟嶺(東安南方一五料)以東当壁鎮(興凱湖西北端)、虎頭を経て繞河に亘る間にして廟嶺、当壁鎮は在東安369の担任とし興凱湖東北側より虎頭を経て独木河(虎頭北方五十料)に亘る間は在虎林368の担任とし別に東安の369より室清に派遣せる部隊をして饒河方面を担当せしめあり其の兵力配置の概要前記要図の如し

0480

1733

1734

但し虎頭地は軍直轄のガ十五國境守備隊ありて警備を担任あり

右國境警備隊は日蘭東軍滿ノ國境警備要領に準ず據し隠忍自重國境の靜謐保持に勉めたり

三、編制、裝備

一、部隊の編制

独立混成方七十七旅団、方三十一國境守備隊等を以て假編成し、また方百五十九師団は七月三十日編成を完結す師団は編制より一軍團記載、如く其の人員に於て約四分一不足し馬匹は概ね充實あり

二、裝備

師団の裝備は著しく劣等にして其の實力は當時の一般師団の約二分一程度と見ることを得即ち歩兵に於ては歩兵砲は三一式山砲を以て代用、大隊砲を有せず、機関銃、輕機関銃は定數の二分の一、砲兵隊に於ては三大隊の内二大隊は一中隊三門の野砲

1480

編成（砲種は改造野砲、騎砲）他の一大隊は一中隊四門の迫撃砲
編成の如き状態なり又防疫給水部の如き人員のみにして
何等の器、材を有せず
彈藥は軍に於て保有せるもの小銃一挺には小銃彈約百発野
砲一門に付五、六百発但し徹甲彈等對戰車用は皆無にして全
部榴彈、爆藥は大口径火砲彈丸の炸藥を抽出せるもの
數もあまりありき

0872

1736

才二、対蘇作戦実行期の状況

一、蘇聯参戦直前の態勢

ハ、兵力配置

才二の一に記述せしむるに同じ

又、戦力状況

各部隊とも中隊長は少尉か大尉、准尉を以て代理せしむるあり

下士官兵の素質も一般に低下しあり特に兵の素質の低下は著し

教育、訓練の程度、装備の状況は前記の如し

総合せる師団の戦力は一般師団の二分之一に非ざる程度と

見ざるを至当とす

3. 作戦準備の程度

予定の防衛線に於ける築城は半成程度但し対戦車阻止

施設は全く未着手なり

志急陣地に就き得る兵力は麻山前進陣地ニ大分、七星主陣

地ニ大分、二大分A主力P但し歩兵の重兵器、砲兵の火砲、工兵の器

材は東安及西東安の屯営に在り彈薬は殆ど携行しあらず

一部携行大部は

0873

1737

右以外の兵力は警備の必要上國境、虎林、東安、宝清に在りて之等の兵力を予定陣地に集結する為には汽車輸送を利用せざる限り相當の口數を要す

之を要するに状況以上の如くなるを以て独ノ我勝利より士氣昂リ敗我又敗我の日本軍に対し優越感有し加之空陸に優良装備を誇るソ軍の前には當時の関東軍の如き真に鎧袖一褌の感なき能はず

4. 部隊の状態

師団長、參謀長は八月五日より開催の六團長会同及司令部演習出席の爲松河軍司令部に出張し島川參謀留守しあり各部隊は編成業務の殘務整理と素教育補充兵の教育を行第城作業務は他の業務に關係なく作業を續行す

軍司令部の状況判断は口ノ軍は日取辺廣く相當雨路骨なる挑発行為に出ても今直ちに攻撃するにありと但し判断の基礎は不明なり

0874

1738

二 蘇聯参戦當時の状況

一 参戦直前の國境事件

昭和三年 春以隣國境に於ける 軍の態度は我方の弱味に乘じ得
 ず勝手なることをするやり方なりしが太平洋作戦に於ける日本軍の
 相次ぐ敗戦三年五月独逸の決定的崩壊等諸般の情勢は
 益々日本の敗色を濃くするに至りソ側の挑発的、侮蔑的態度
 は愈々其の程度を増し不法越境、飛砲、密偵の潜入等各種
 の事件頻繁するに至りたるも我方は終始隠忍自重いたすら
 べし軍との間に事を構えざらんことを希ふ状況なりしなり
 八月五日正午頃虎頭南方約四十料干厘屯向地視察班(將校
 以下約三十名)正面に約二十名の將校自動車により國境線に
 進出し眼鏡を用いて滿領内を視察しありしが突然蘇側の歩
 兵約百余名は向地視察班の東南方約千米の地点に於て烏
 甘蘇里河(國境線)を渡河して滿領内に侵入し我が向地視察
 班に向ひ射撃を開始し其の前面五六百米に近接せしも我方
 は陣地に就きたるまゝ之に応射することなく隠忍自重せり夜

0875

1739

に入るも附近草原に伏臥し後退の模様なかりしを以て軍に於ては東
安師団司令部に柏田参謀を派遣状況を觀察せしめつゝありしが
翌六日には蘇側は引揚げたるもか敵影を認めずとの現地報告
に基き同参謀は掖河に帰還し折柄兵团長会同實施中の
軍司令官及各師団長に其の状況を報告せり(師団長参謀長
は会同に出席あり)柏田参謀は「今迄にも虞あつたか今回のも
單なるいせがらせであつてころうか相手にならなければ大軍に至
ることあるまい」と觀察せり

今回の事件は従來のものに比し相當大がかりのものにして今後二日後
の八日夜半より蘇軍が全面攻勢に出でたるより觀察するに之に
より日蘇開戦の端緒を作物するか若くは日本軍の動靜を打
診するか何れにしても全面攻勢の事前工作なりしこと明白な
り我方^(赤)國際情勢力の冷靜なる判断を缺き確乎たる論
據なきに拘らずソ軍参戦の時期を~~推定~~推定せし~~日~~日~~軍~~軍~~の~~の~~動~~動~~靜~~靜~~を~~を~~打~~打~~診~~診~~す~~す~~か~~か~~何~~何~~れ~~れ~~に~~に~~し~~し~~て~~て~~も~~も~~全~~全~~面~~面~~攻~~攻~~勢~~勢~~の~~の~~前~~前~~工~~工~~作~~作~~な~~な~~り~~り~~し~~し~~こ~~こ~~と~~と~~明~~明~~白~~白~~な~~な
極めて甘く判断して至極各氣に構へ思はざる不覺を取
りたるは返す返すも遺憾千萬なり

乙、師団司令部の行動

師団長、參謀長は前述の如く兵團長会同及司令部演習出席の爲
掖河にありしが八月九日午前三時頃突然司令部に出頭を命ぜられ
たの情報を達せらる

午前一時頃より軍司令部には國境の各部隊より当面の状況を
傳へる緊急電話引きも切らず之等を綜合するに蘇軍飛行
機は八日夜越境して滿嶺内を乱舞しあり綏芬河地区、觀月
台地区各國境警備隊、虎頭才十五國境守備隊は午前一時前
後敵砲火の射撃手を受けつゝあるも我方は志我することなしと
茲に於て左記要旨の軍命令を達せらる

才五軍命令

掖河

2280

- (一) 敵は八月八日夜半以來各方面の我が國境警備隊を砲撃中
にして其の歩兵の一部は既に國境を突破侵入せるもの、如く其
の飛行機は深く滿嶺内に侵入し乱舞しあり
- (二) 軍は一部を以て國境既設陣地及國境附近の地形を利用し
侵襲する敵の前進を遲滞せしめ主力は穆稜八面通各西側

1741

林口南方地に亙る主抵抗陣地帯に於て縦深抵抗により敵戦力を破砕せんとす

(三) 略

(四) 第百三十六師団は一部を以て十文字峠より梨山、半截河を経て尚志屯に亙る既設陣地を占領し敵の前進を遼滯せしむると共に第百三十五師団の林口方面への轉進を掩護し主力は八面通西方自興屯附近の既設陣地を占領し縦深抵抗により敵戦力を破砕せしむ

(五) 第百三十五師団は一部を以て庙山嶺附近より以東饒河附近に亙る國境既設陣地を占領し敵の前進を遼滯せしめ主力を以て林口南方地に既設陣地を占領し縦深抵抗により敵戦力を破砕せしむ

一部を以て麻山前進陣地を占領し敵の林口方面への突進を防止せしむ

8480

1742

(六) 各兵團の作戦地域の境界たの如し (線上は右兵團に属す)

第百二十六師団

馬欄河、ハル高地、葉泥河子、滿人船口

第百三十五師団

を連ぬる線

第百三十五師団

勃利、河爾金山を連ぬる線

佳木斯兵團 (340)

(七) 第十五國境守備隊は東かに既設陣地を堅固に守備しイマン

地区敵後方遮断に任じ軍の作戦を有利ならしむべし

(八) 以下略

(別紙)

軍隊区分

第百三十五師団

配属部隊

野戦重砲兵第二十聯隊の中隊

師団長は右命令を要領すも之に基く處置を電話を以て

在東安島川参謀に指示し一応東安に帰還する為飛行場に

6480

1743

到れば敵機既に上空にあり飛行機による帰還は困難なるを以て汽車によりられ度との係員獎勵に從ひ直ちに牡丹江驛に到りガソリンカーを利用し参謀長以下隨行帰途に就けり時に午前六時頃なり(才百三十四師団長以下も同時ガソリンカーにより佳木斯に向へり)當時牡丹江驛は多數の邦人おしかけ混雑ありたり途中七星驛にて兵器器材受領の為一部の者の東安及西東安帰還、主力は直ちに幾斗雅備、林口驛にて一才370を以て直ちに麻山前進陣地の占領、日一才370及挺進大隊は迷かに汽車輸送により七星に^口を夫々連絡者に命令す

0880
 國境に近づくに從ひ驛の雜沓甚しく平陽驛に到れば本線は既に敵戰車部隊により東安西方地区に於て遮断せられありとの風評甚の他種々の流言蜚語あり折柄牡丹江驛を午前十七時何分かに発車せし列車到着す一般邦人及七星驛にて乗車せる部隊にて 満員なり一般邦人は全員下車せしめ絶對の要件ある者のみ危険を覚悟の上にて再び乗車せしめ師団の部隊には万一の場合の部置を命じ同驛を發車す東安驛

到着は午後六時頃なりしが途中何等の事故なし同列車は引
續き虎林に向へり東安驛には邦人殺到し著しく混雑あり
師団長及参謀長は直ちに司令部に到り島川参謀に会し状況
も聴取せり

島川参謀が處置せし半項、師団長が東安帰還迄に命令せ
し半項及新に命令せし半項を綜合すれば尤の如し

(一) 七星の陣地構築部隊(二大/3680 一大/3690 一大/3900 二大/135A 主力/135P)は主力を
以て直ちに戦闘準備、一部は兵器器材、彈藥受領の爲東安

西東安に帰還

(二) 林口の部隊(日/二大/3700 越進大隊)は一大/3700を以て麻山前進陣地の
占領(満軍と協力)日/一大/3700、越進大隊は汽車輸送により

七星に集結

(三) 東安、西東安の部隊の内日/3690は一部を以て東安附近に陣地を
占領して 轉進掩護、主力は東安より勃利より七星道を

1880 七星に集結

日/一大(中/135A)は七星の陣地に集結 一中/135A 一部/135Pは麻山に到り

1745

前進陣地占領部隊長の指揮下は共に汽車輸送

DTL 135T 兵勤、S、防給、病馬廠は勉めて汽車輸送によるも止むと

得ざるものは東安一勅利一七星送を七星生に集結

(四) 虎林のP、³⁶⁸天は敵の前進を遅滞せしめつ、七星の陣地

に集結

(五) 虎頭の才十五國境守備隊(八月九日師団長の指揮に入る)

は軍の命令せし所に基り、任務續行

(六) 師団司令部は十日午正前零時出発東安一勅利一林口送

を先づ林口に到る

3. 各國境警備隊及虎林、東安部隊の状況

國境警備隊は各方面共九日早曉敵の急襲を受けたるもの如く

九日夕刻に於ける状況概収左の如し

廟山令地区に於ては才一線警備隊との電話不通、玉碎せよものと

判断せらる、廟山國境警備隊は兵力を集結東安に後退すべく

準備しつ、あり

虎頭以南の才一線警備隊及大橋國境警備隊は何れも電話

0882

不通の状況不明なるも玉碎せしものと判断せらる

室清國境警備隊も連絡絶たれ状況不明なり

虎頭のガ十五國境守備隊は全周包圍を及べけ状況不明なる

も軍隊居留民一体となり孤立無援敵の重圧下に奮闘しあ

るもの如し

虎林及東安の右部隊は兵力を集結し轉進を準備しあり

三、尔後の作戰(戦斗)又は行動経過

一、掖河附近師団主力の陣地占領

師団司令部は予定の如く八月十日午前零時東安出發自動車(約

十輛)により勅利に向ふ東安西北方台上に車を止むれば遂か南方に爆

音の殷々たるを聞く又頭を東安方向に轉ずれば炎々たる火焰の天

に沖するあり自動車故障頻発、加ふるに悪路の爲行軍遅々

午後二時頃勅利着次で日没後林口着直ちに軍に連絡折返し

8880 軍より電話あり(軍司令官より師団長に)九日拂曉綏芬河正面

より侵入せる優勢なる敵機甲部隊は同日綏陽を突破本十日

夕には下城子附近に進出あり軍は予定計画を変更

126D
135D
を

1747

以て掖河附近に陣地を占領せんとす師団長は陣地偵察ヲ為速かに
軍に出頭すべし」と

時恰も師団長は赤痢様下痢の為安静を要する容態なりしを
以て参謀長之を代行することとなり参謀長は師団各部隊を掖河
に集結の處置を島川参謀に指示し翌十一日將校一、下士官一を伴
以列車により掖河に向ふ

参謀長は十一日午後四時頃軍司令部着(牡丹江驛は爆殺手を受
け混乱状態にあり列車は構内に進入するを得ず構外の畑地に下車
す)左記要旨の軍命令を受領す

カ五軍命令 掖河 二、三〇〇

(一) 軍正面の敵は其の主力を穆稜附近に指向しあるもの、如くカ百二十
四師団は該敵を迎撃撃散中なり

(二) 軍は掖河附近に陣地を占領し牡丹江以東の地区に於て敵の残
力を破摧せんとす

0880
(三) カ百二十六師団は英基屯附近より貨物廠高地、四道山嶺を經
て標高371高地に互り陣地を占領し敵の残力を破摧すべし

SA一中、一大³⁶⁸ⁱ(135D)、2.3/18Ps、軽装四輪を配属す

(四) 才百三十五師団は才百二十六師団に連繫し(標高371高地(含ま

ず)以西樺林南方高地に互り陣地を占領し敵の戦力を破摧

す

一大³⁶⁸ⁱを才百二十六師団長の指揮に、挺進大隊を筆直轄たらし

むへし

(五) 才百二十六師団、才百三十五師団間の作戦地域の境界は掖河

西北端、標高371高地(含まず)を連ぬる線とす

(六) 其の地略

此時既に林口の挺進大隊、七星の一大³⁶⁸ⁱ、一大³⁷⁰ⁱは掖河着待機

しあり又翌十二日には林口より日³⁷⁰ⁱ、七星より一大³⁶⁸ⁱ、一大³⁶⁹ⁱ到着の

予定なり(午後) 一大^{135A}

参謀長は十二日早朝、一大³⁷⁰ⁱの大隊長(瀧川少佐)を伴ひ掖河西北

方高地に於て陣地偵察を行ひ即時陣地を占領を命ず

軍の情報によれば敵機甲部隊の一部は八面通―自興屯―仙洞

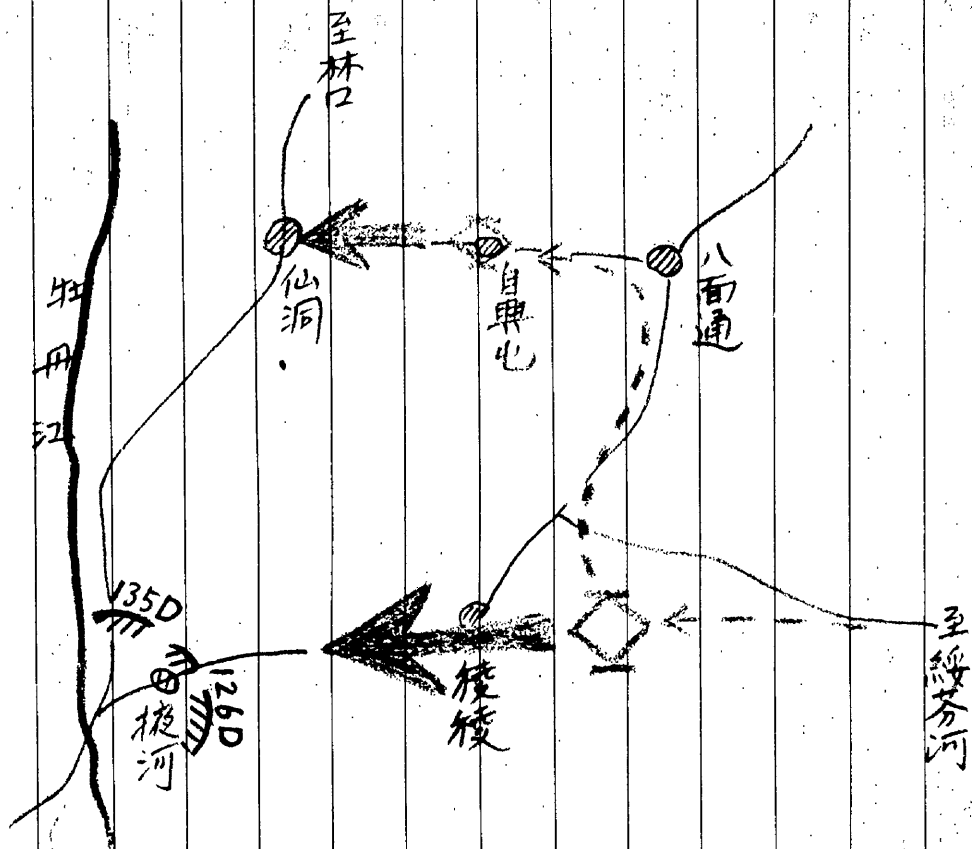
道(新道)を前進(午後五時頃其の先頭仙洞附近に達する距

十二日

1749

5880

離にありと



1750

0886

十二日夕林口及七回生よ部隊到着し直ちに陣地占領を命ず
参謀長の同伴せし将校(高瀬中尉)をして軍より小銃弾、野
砲弾(榴弾のみ)爆薬(黄色爆薬及飛行機用十五磅爆弾
を要領陣地後端附近に集積せしむ

十二日夕迄に掌握し得たる兵力左の如し
師団司令部(参謀長、将校一、下士官一)

- 二大 370i
- 一 大 368i
- 一 大 369i
- 一 大 135A
- 一 中 135P

(右の外一 大 368i、推進大隊は 126D 及軍に配属す)

右の内 370の○及兩大隊長は何れも本職、一 大 368i、一 大 369i、一 大 135A
の各大隊長は何れも代理にして中尉、一 中 135Aの中隊長は本職
なり又一 大 135Aの砲数は約十門なり

陣地の強度は十三日夕迄に概収立射散六壕に若干の交通壕
を完成し得たるも連続せる一連の陣地とする程度に至らず鉄
條網、我車壕の如きは比白無なり

掘河附近に於ける師団の陣地占領左記要図の如し

2880

1751

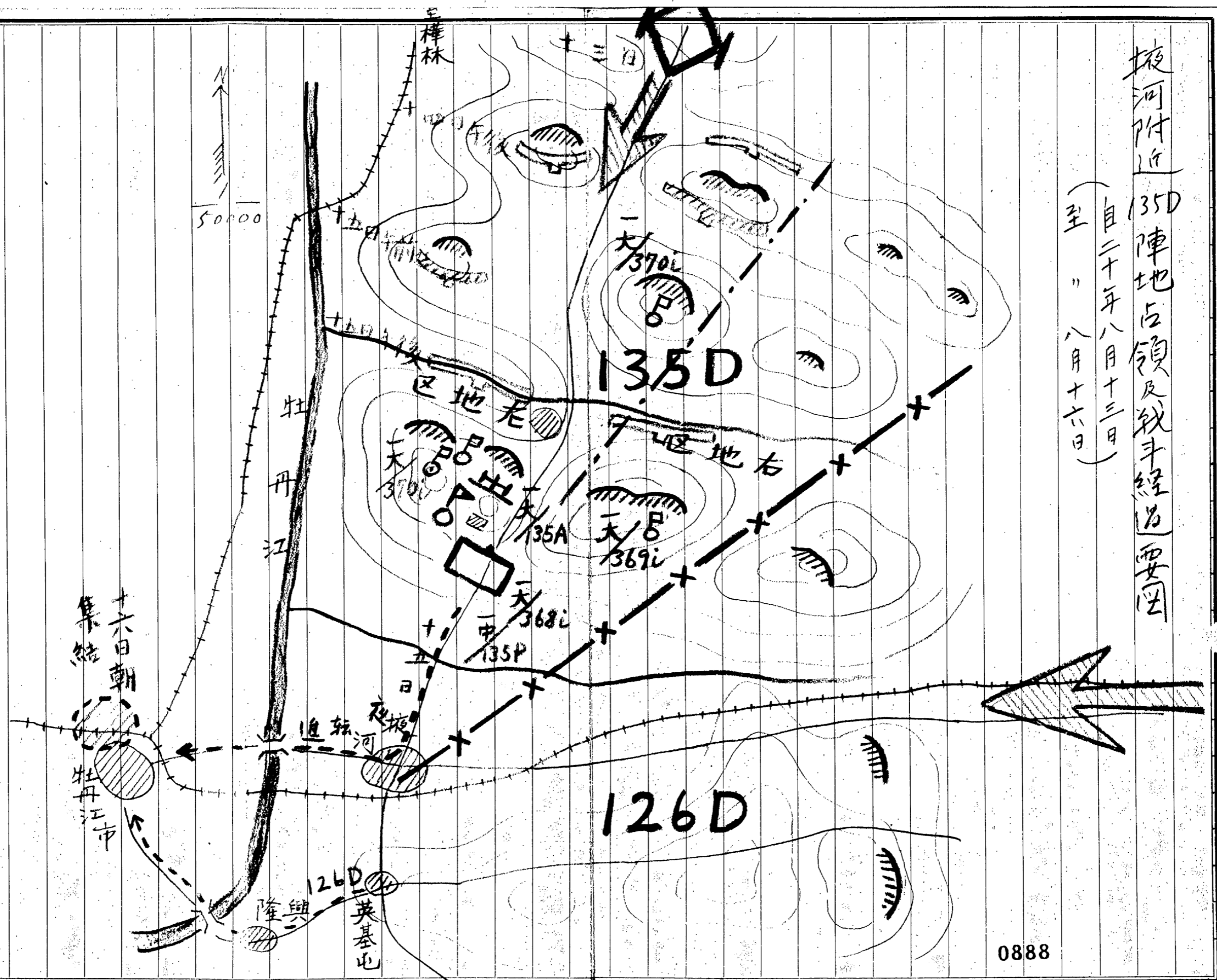
1752

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp>

坡河附近
 135D
 陣地点領及戦経道要図
 (自二十年八月十三日
 至 " 八月十六日)



陸軍

0888

1753

え 掖河附近師団主力の戦斗

八月十三日の戦斗

八面通、自興屯、仙洞を経て樺林附近に進出せよ敵の機甲部隊は十三日早朝我が陣前に現出攻撃準備を始めたが如し敵は戦車を主体とし砲兵を有す午前十時頃敵は戦車十数輛を以て本道上(樺林-掖河道)を縦隊となり攻撃し来る我が左地区第一線大隊(大隊長瀧川少佐)は道路両側に準備せる肉攻班を以て攻撃を加へ先づ其の先頭戦車を擱せしむ敵の前進速度稍^レ遅^レ緩^レせしむ高前進を續行す 後續戦車は我が猛烈果敢なる体當りに逢ふや攻撃を断念して反轉し高地北側斜面に姿を没せり擱生戦車は修理ありしか如きも復旧成らざりしか戦場に遺棄せり

敵砲兵は散発程度に射撃せり我が砲兵は當初敵の前進妨害、尔後敵の後方戦車に対する射撃、擱生戦車の修理妨害の射撃を實施せり但し彈丸は榴彈なるを以て敵戦車に命中するも何等の實害を與へず眞に残念なり

6880

1754

敵の兵力は彼の自慢するT34型を主体とする戦車約一聯隊砲兵十門内外にして、狙撃手兵(歩兵)を伴はず、

敵戦車には数名の兵搭乗しあるものあり其の中には女兵も混れり敵戦車が縦隊となり道路上を攻撃し來りたるは路外が概収輕濕地なる為なり

敵は我に暴露路せる地点にて悠々掘生戦車の修理を行ふ其の行動大胆不敵なり

T34に対する肉攻に於ては最少限一連の爆薬を必要とす是れ以下にては何等の效果なし

朝來

戦場上空には敵飛行機乱舞の状態にて活躍し

あり大部龍巻戦機我方機偵察機一機小銃射撃

にて撃墜せり参謀らしき將校搭乗しあり所持しありたる作戦書類は軍司令部に送附せり

本日午後二回に亘り敵は戦車十數輛を以て攻撃を反覆す敵の攻撃の要領は概収午前と同じ毎回我が捨身の肉攻により敵を撃退す掘生戦車二輛を出せり

八月十四日の戦斗

昨日の戦斗に於て擱生したる戦車は夜間敵により處理せられたるもの、如く戦場に其の姿を認めず敵戦車を一旦擱生せしむるも尔後再起不能の程度に處理を加へ置くと極めて重要なるを痛感せり

本日朝来敵戦車は歩兵部隊協同の下熾烈なる砲撃を加

へ昨日の要領を以て攻撃し來る又地上の攻撃に協同し上空

よりは優勢なる飛行機を以て対地攻撃を反覆す

我が将兵は勇戦敢斗克く敵戦車の突進を阻み之を陣

外に撃退したるも午後に至り左地区第一線の左翼陣地は敵

の為奪取せらる

本日擱生せしめたる敵戦車三輛なり内一輛は取も深く突入

せる戦車にして我が第一線大隊本部の位置する高地西側の

路上に在り軍司令部に状況を報告せし所軍より参謀調査に

來る正しくT34型なり我が肉攻の爆破により底板後部に裂傷

あり砲塔は75耗級と推定銃身長大なり楕圓MG前部後部

1680

1756

右二あり天蓋を崩かんとすれども堅固に閉ざれて果さず幸ひ
敵の攻撃し來る道路の真中にあるを以て明日の戦斗に於て
は敵戦車の障碍となり極めて好都合なりと考へ搭乗員は全
部爆死したるもいと推定し其のまゝに放直し置くことせり然
る所夕刻頃其の戦車の状態變化しあるを我が監視兵が発
見し近接せんとしたるに其のMGにより射撃せられ近接する能
はず我が監視の隙を見て一方の側面を高地脚の小屋に依拠す
る如く道路の側に空射せ其のMGにより射撃を準備しあり
たるものなり茲に於て我は戦車の死角を利用して之に近接し
ガソリンを用ひ炎上せしむ火勢上るや突如天蓋を崩し搭乗員
飛び出し拳銃射撃を以て我に抵抗す我が包圍攻撃により遂に
全滅に至らしめたり搭乗員は六名なり

右の例に見る如く孤立無援敵中に遺棄せられたる状態に於て竟く
最善を盡し遂に戦車と運命を共にしたるソ連戦車兵の細心にして
沈着豪胆祖國に対する中心誠心實に高貴讚に價あるソ連の戦車兵
は確かに強いといふ深刻なる印象を得たり

0892

1757

本日の改撃に於てはT34型の外若干の軽戦車ありて路外に展開し改撃し來れり敵砲者の射撃は相當激烈なりしも僅中

的ならざりし為に拒撃は比較的僅少なり

絶對的に制空権を敵に奪し我に一機の飛行機一門の高射砲

あり我軍はほゞみじめなるはなし

敵は昨日日本日とも126Dに隣接せる我が地区山地方面は全然改撃せ

ず左地区の本道及其の兩側地区のみを改撃し來れり而して本日

敵より受けたる圧力より觀察するに肉攻一本槍の手段を以ては明

日の戦斗に於て一線大隊の陣地の保持は概ね困難なるべ

く状況によりては二線大隊の陣地に食ひ込むと慮あり

八月十五日の戦斗

昨日來軍主力方面の戦況我に非なり軍司令官は最後の訓示

を發せらるる本日師団正面の敵は朝來戦車を主体とし歩砲

飛の協同の下圧倒的優勢なる戦力を以て改撃し來る午前

中には一線大隊の陣地概ね奪取せられ大隊本部(大隊長

瀧川少佐)のみ幸うして其の陣地を保持しあり午後に至れば

8680

敵は概収陣地内小流(第一線大隊と第二線大隊との中間の小流)の線に進出歩砲の支援火力を高度に発揚し遮二無二戦車を以て我が陣地を突破せんとす正に決戦の時機迫る時に午後三時頃なり突然軍より多田参謀来り命令を傳ふ要旨左の如し

第五軍命令 掖河 八一五、二〇〇

(一) 軍は本夜暗を利用し牡丹江を渡河し横道河子附近に向ひ轉進し後図を策せんとす

(二) 才百二十六師団は本夜二十四時陣地を撤し興隆橋を経り先づ牡丹江西南側に向ひ轉進すべし

掖河部サ洛南側道路は才百二十六師団に於て使用すべし

(三) 才百三十五師団は本夜二十四時陣地を撤し掖河北側道路を経り掖河西側橋梁を渡河し先づ牡丹江西北側に向ひ轉進すべし

(四) 略

(五) 右部隊は十六日八時日方一方面軍司令部廳舎に命令受領者を出すべし

(六) 其の他略

0894

1759

蓋し右命令は方面軍よりの新なる訓令に基き、軍中旅を陸軍中隊に改めたるものなり

茲に於て師団長は各隊命令受領者に轉進に關する師団命令を
下達し準備せしむ

敵の攻撃は愈々激烈となり敵戦車數台司令部附近に蔓藤維し
來るあり肉攻班決死の体當り、砲彈の炸裂、彼我の喊声等
薄暮時の戦況は壯烈博覧を極め、夜に入るとともに戦場は次
々に靜穩に歸し敵の第一線は概收小流の線に後退す

3. 各國境警備隊の戦斗

(1) 廟山、密山方面國境警備隊の戦斗

廟山陣地守備隊(元369)より前方に派遣しありたる國境監視部
隊は九日早曉より敵の攻撃を受け苦戦奮闘せしむ其の陣
地に於て玉碎せるもの如く又廟山守備隊の主力は正午頃陣地
前面に一部の敵進出せしむ其の行動活潑ならず師団命令に
基き九日午後七時頃戦斗を交ふことなく東安に後退し聯隊

5680

1760

主力に合セリ

廟峯密山方面に進出セシ敵は当初約一二大隊なりしも逐次増加し一師団内外となりたるが如し

(2) 大橋、虎頭南方地区各國境警備隊の戦斗

虎頭以南烏サ蘇里河(國境線)に沿ひ配置しありたる右向地視察班又は國境警備隊(長以下二〇乃至三〇名)は九日早朝以來敵の急襲を受け全滅セムか或は全く包圍せられたるも、か全く連絡を断り

大橋(虎林南方約六〇科一平³⁶⁸)は九日正午頃より約二三大隊の敵の攻撃を受け、ありたるも同日夕刻頃より連絡を断ちたり恐らく玉碎せるものと推定せらる

(3) 饒河附近國境警備隊の戦斗

饒河附近に於ては九日早曉同地北方地区に於て烏サ蘇里河を渡河せる敵部隊逐次饒河に近迫す守備隊を
迎撃せしと衆寡敵せず夜暗に乗じ宝清方面に後退セリ

4. 樺林附近師団司令部の戦斗

十日夜東安より林口に到着したる師団司令部(参謀長の陣地)偵察の爲十一日掖河に先行す(車中の車中(未照)は十一日、十二日同地に在りて部隊の掌握、輸送に専念しありしが十三日3700の残余、一太20SA(斐徳殘留部隊)等と共に列車により掖河に向ひ同日夕刻樺林に到着せしが折柄八面通方面より轉進同地に集結しありたる敵戦車部隊と遭遇す敵は直ちに其の戦車砲を以て猛烈なる射撃を加ふ我は急遽下車、心算に勉めたるも全く潰乱状態に陥り或は砲弾に斃れ山林内に遁入し或は牡丹江を渡河せんとし之に飛込む等惨状言語に絶す師団長は一部人員と共にわすかた危地を脱し牡丹江右岸沿ひの山陰に避難しありたる所十四日参謀長の許に(当時参謀長は掖河西北方高地に在りて戦斗中)此の報到り同日一部を派遣して救出す

2680 右敵の戦車部隊は八面通、自興屯、仙洞を経て十二日夜樺林に達し十三日樺林南方に陣地を占領しある我が師団を攻撃せしが戦斗退せられ樺林に集結しありたるものなり(車中の車中(未照))

十三日林口出発の時仙洞、樺林方面に敵部隊侵入しあるの報に接しあ
 リしを以て十分なる警戒戒心を以て前進し 樺林にて敵戦車に遭遇の際
 強行通過せんとしたるも當時既に牡丹江の鉄道橋及道路橋共一
 方面軍直轄部隊により焼却せられありし為列車は立往生となり
 右の結果を招き來せるものなり
 此の戦斗により島川参謀戦死、副官二名行方不明、軍医部長(谷
 村中佐)高級軍医(河野少佐)獣医部長(角々藤中佐)は河
 師団司令部に辿り着き経理部長は満服に変装して山野を彷徨
 行方不明
 他司令部の将校、下士官も多数戦死又は
 行方不明

天/20SA は火砲を卸下し応戦せんとしたるも果さず大砲は全滅、人員は
 多数戦死又は行方不明となれり

5. 師団主力の横道河子への轉進及武装解除

(1) 轉進及陣地占領

十五日師団主力の掖河附近の戦斗は前述の如く決戦に至らずして夜に入る(米軍の朱恩)彼我方一線は七八百米を隔て戦場は靜穩なるも敵は頻りに照明弾、信号弾を打ち揚ぐ師団は予備隊、砲兵隊右地区隊、左地区隊の順序に撤退し所命の進路を前進し主力は十六日拂曉迄に掖河西側橋梁を通過して牡丹江西北側に集結す師団の轉進は晝間の混戦乱斗に拘らず概収順調に實施せられ十六日拂曉に及ぶも追撃する敵を認めず瀧川大隊の如く敵中に置き去りとなりたる部隊は十六日天明後師団の轉進を知り三々五々となり四散せり

6680
 師団は予定地に集結の後更に横道河子に向ひ轉進す敵部隊の追撃するものなきも敵機は朝來悠々飛翔して爆撃、銃撃を以て我が行動を妨害す師団の各部隊は敵機の連續攻撃に
 より隊伍は混乱して全く無秩序、無統制の状態となりたるも十七日夕刻迄に横道河子に集結せり

師団は十七日朝陣地占領に關する軍命令を受領諸偵察を
行ひ逐次到着する部隊を整理し陣地に就かむ

師団の陣地は横道河子の東方約六軒本道(含む)以北の地区
にして諸所にIPsにて構築せし既設陣地あり(隣接126Dの陣
地は本道(含む)以南の地区なり)

(四) 武装解除

十七日午後十一時過參謀長^は軍司令部に招致せ^{られ}ラントにて受
信せる陛下の重大放送(若干脱^カ落あり)を示され日本の無條
件降伏を傳達せらる尚本件は方面軍よりも指示ありたるもの
にてデマにあらざるを附言せらる

十八日午前武装解除^降に關する軍命令を受領蘇軍は横道河子
侵入^{同日}自由武装解除を受く

(イ) 虎林東安部隊の行動及武装解除

0060
虎林附近駐屯の部隊は飯塚大佐(5/368)の指揮を以て九日夜
半虎林出發徒步行軍により完達山系を東安北方を経て
松河方面に轉進中滿軍叛亂部隊等の妨害を排除して後退

林口東北地方地区に到着せる時停戦を知り八月下旬同地にて武装解除を受く

東安、斐徳、西東安附近駐屯の部隊は鉄道情報により敵の一部既に東安、鶏寧中間地区に侵入し、鉄道に沿ふ地区の後退は困難なりしを以て師団命令に基き九日夜半東安出發、東安―勅利道を勅利に向ひ後退し同地に於て列車を編成して撿河に向ふ勅利集結邊れたる部隊は八月十七日勅利出發、列車により撿河に向ふんとせしに敵既に林口に侵入せざるの報を得途中下車し中山大佐(呂/369)の指揮を以て林口北方を西進し同地西方地区に於て牡丹江を渡河し(森林鉄道橋)横道河子北方を経て又プロニー東方地点(冷泉)に進出し大部は八月末より九月上旬同地附近にて武装解除せられ一部は遠く敦化、吉林方面へ逃れ九月中旬武装解除を受けたるが如きも詳細は不明なり

四 彼我損害

1060 曰蘇開戦以來武装解除迄の彼我の損害に就ては師団の状況が上述の如く且停戦後部隊との連絡、調査等一切の行動を

以嚴林平せられ高約五年に亙る抑留生活の爲殆ど推定にふる外
あるも大要をの如し

我が被害

掖河附近の戦斗より横道河子轉進迄我死約千名

國境警備隊にて我死約千五百名

師団主力と考れし行動中我死約五百名 計約三千名

行方不明約千名 自動車約十五輛は

野砲十八門、迫撃砲十二門我場にて破壊せらるゝか若くは鹵

獲せらる

馬匹約三千鹵獲せらる

敵の被害

掖河附近の戦斗にて我死約千

戦車の擱坐せしもの約十輛

五、終戦時の状況

人能心執力並戦力

蘇軍の参戦が全く不意急襲なりし為軍全般は勿論師団として
 も當初より統一ある行動作戦を行ふことを得ず終戦時師
 団司令部と共に横道河子に在りたる部隊は一大³⁶⁸、一大³⁶⁹、³⁷⁰
 挺進大隊、二大^{35A}、一中^{35A}にて兵員数は約五千に過ぎず
 捷河附近の戦斗にて敵中に残存しありたる部隊は思ひ思ひの方
 向に四散し虎林附近駐屯の部隊は徒步行軍中八月下旬林口
 東北方地区にて武装解除を受け東安附近駐屯の部隊中徒
 步行軍せしものは八月末より九月上旬ヤブコシ附近にて武装解
 除を受くるが遠く敦化、吉林方面に到り同地附近にて蘇軍に収
 容せらる、等々全く支離滅裂の状態なりき

0903

終戦時横道河子に在りたる部隊中歩兵隊は概収小銃のみ
 携帯、肉攻用爆薬は數挺に過ぎず、砲兵隊は野砲二門、迫
 撃砲四門のみ司令部は師団長、参謀長、副官代理(中尉)一軍
 医部長、高級軍医、獣医部長、勤務将校三、下士官三、歩兵隊は

3700 聯隊長ある外聯隊長及大隊長比皆無、越進大隊は大隊長現存、
砲兵隊は大隊長一名、工号隊は中隊長一名あるのみ以上の如くなり
を以て當時の師団我力は、剛戦前の三分一以下に低下しありしも
のこ観察す

又蘇軍との交渉

軍司令部に於ては八月十七日軍使を在牡丹江^蘇軍の司令部に派遣
し交渉を開始す師団は其の交渉結果に基く軍の指示により行動
ある予定なりしか十八日蘇軍の將校(中佐級)師団司令部に來り我
が軍司令部の存在等を全然無視して師団と直接交渉を始め殆
ど一方的に尔後の行動を命令せり

3. 尔後の推移

師団の武装解除は十八日完了す師団長は十九日軍の他の將官と共に
蘇側に收容せられ、司令部の者は同日牡丹江の民家に收容せられ、
右部隊は十九日横道河子出發徒步行軍により二十日梅林及~~林~~
拉古收容所に移さる

0904

師団長は自動車により牡丹江に向ふ途中蘇軍の將官に禮儀なりとて

軍刀を強奪せられ各部隊の將校以下は拉古に向ふ途中時計靴、
図囊、帶革等を行き交ふ蘇軍の將校以下に略奪せられ、不眠不休
の状態にて梅林又は拉古に到着せり

抄

收容所の建物は残存せる格納庫、倉庫、官舎の外軍に雨露を凌
ぐ程度の急造の小屋にして收容所内の給養は牡丹江野戦貨物廠の
残存糧秣に依存するものなるを以て定量に達せず野菜の如きは全く
支給せられず下痢患者多発營養状態頗る不良なりき

右の收容所に收容せられたる者は八月末より約千名毎の梯団を
編成して逐次徒步行軍により綏芬河を経て蘇領に移動せしめら
れその内將校の大部は十一月六日牡丹江発列車により改路ラ
ダに輸送同地の收容所に收容せらる

5060

1770

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

1771